

大塚けんじ議員が加わりました!

スピードある
住民福祉を!



緊急インタビュー 大塚けんじに聞く! 市民力を選んだ理由

●大塚健児(けんじ)プロフィール

所属 建設経済常任委員会

昭和54年生まれ(35歳)。群馬県太田市出身。法政大学法学部政治学科卒業。大学時は体育会野球部のマネージャー。元松戸市職員。

—この度、市民力に電撃参入した大塚けんじ議員にお話を伺います。早速ですが、議員を志した理由は何ですか?

生活保護制度についての問題意識が強いです。職員時代、ケースワーカーとして生活保護を受ける方々と接する仕事をしていました。私自身が右耳の聴力ゼロの障がい者ということもあり、金銭的・精神的等で苦しい生活をしている方の痛みを知り、寄り添って助けたいという気持ちが強くありました。

—大変そうな仕事ですね。

はい。しかしその中で、生活保護の不正受給もありました。本当に苦しんでいる人がいる中で、大切な税金を不正にもらっているなんて…更に、年々膨れる扶助額や、年金より支給額が多いケースなどの矛盾も現場で目の当たりにしました。ケースワーカーの膨大な業務量等も含め、納得いかないものばかりで「スピード感を持って変えねば!」と強く思いました。そこで市職員を辞め、議員を目指したのです。

—なるほど。でも当選直後は別の会派に所属していましたよね?

はい。私はみんなの党の公認で出馬しましたが、そのうち当選したのは私1人で、しかも直後に党自体が解散しました。政策実現のスピード感を重視したいと思い、お世話になっていた川井敏久元市長を中心とした「清松会」を選びました。しかし、定例会を重ねるうちに、私が求める改革とのズレを感じたのです。と言うのは、市長が上程してくる議案等について、本郷谷市長憎しと言いますか、論理的な是々非々の議論ではなく、感情的な議論になってしまっている傾向が強く、このままでは単に現職市長を批判しているに留まるどころか、私が求めていたスピーディーな住民福祉の実現が後退するという危惧すら感じたのです。また、この4月に、議員辞職勧告を受けた議員の会派合流も、私が求めていた方向性とは明確に違うと感じたため、自分から会派を離脱しました。

—でも、今回再び少数会派の「市民力」に入ろうと決めましたね。繰り返しますが、私が目指しているのはスピードある住民福祉です。6月定例会は無所属で活動をしました。しかし、幹事長会議・議運・各常任委員会等々…傍聴はできますが発言権はありません。このまま自己満足でやっていると、スピード感ある住民福祉の実現ができないと、1人会派の活動に限界を感じました。そんな中、6月定例会の議案等の態度が市民力と全く

一緒だったことや、個々の賛否を公開する姿勢自体にも市民力に感銘を受けました。特に、「安保関連法案の廃案を求める意見書」に賛成する姿勢など、政策に共感した事も大きいです。また、先の定例会の35名の一般質問の中でも、ココット問題や行政組織の人事問題を取り上げた山中啓之議員の質問は非常に印象的でした。下資料の準備に始まり、裁判所の傍聴に行くなどの現場主義。また、相手の話を聞く姿勢、問題点を論理的に説明するところ。そして何より昭和54年生まれの同級生。「同じ年齢なのに凄い!」と正直感じました。

まだまだ論理性に欠け、感情的な議論をしてしまう自分を反省し、それ以降はとにかく研修会に参加をし、論理性や政策の強化に努めました。すると偶然、複数の研修会や勉強会で山中議員と一緒にになりました。そこで初めて深く政治信念を話し合いましたが、何よりも住民を起点に考え、民間の感覚を軸に、行政組織の問題点を論理的に説明するところが特に共感でき、彼となら「スピード」ある住民福祉を実現できると思い、山中幹事長の率いる「市民力」の門を叩きました。会派名が「市民の力つまり住民起点」を大切にしていることも共鳴しています。

—スピード感ある力強い決意ですね。山中幹事長、同じ年の「先輩」議員としてどうですか。

若手議員の中でも、大塚議員には元松戸市職員という大きな強みがあります。また、障がい者として「人の痛みに寄り添いたい」という言葉にも本音を感じました。何より「長いものには巻かれろ主義」が蔓延する中で、敢えて厳しい道のりを共に歩もうとする彼の決意は、必ずや議会に新しい風を吹かせるでしょう。即戦力として、市民の為に会派で大いに登用するつもりです。

—では、最後に大塚議員。今後の抱負をどうぞ!

私の参入で、より一層市民の力が結集する、明るい魅力ある会派活動となればこの上ない幸いです。言葉では何とでも言えますが、最も大切なのは市民が求める住民福祉の実現です。成果には徹底的にこだわってまいります。宜しくお願いします!

谷口 副代表



山中 幹事長



全員で力を合わせて頑張りましょう!

